青　山　な　を
あお　やま

学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	文　第　15　号
学位授与年月日	昭和46年　7月　1日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	明治女学校の研究
論文審査委員	（主査） 教授　石　田　一　良　　教授　大　内　三　郎 教授　石　井　　孝

論　文　内　容　の　要　旨

1　構成について

本書の目次は記述の内容に従って名目をたてているので、論文構成の骨組は潜在している。いま論文の構成的骨格を露出すると、以下の如く組みこまれる。

(1)　序説　第一章　明治の婦人社会

1　教育制度による概観　　2　福沢諭吉の婦人論　　3　森有礼の婦人観

(2)　本論　第二章　木村熊二と明治女学校

1　明治女学校の創立者　　2　『木村鐙子小伝』と「木村鐙子の伝」　3　富井於菟の場合

第三章　木村鐙子の生涯と明治女学校

1　明治維新の前後　　2　留守宅の生活　　3　開花と結実

第四章　明治女学校論

1　明治女学校の萌芽　　2　明治女学校の発足とキリスト教　　3　明治女学校の形成

(3)　餘論　第五章　巌本善治の女子教育思想

1　教育思想の背景　　2　女学及び女子教育　　3　教育の自由主義

4　婦人の本質・家庭・宗教　　5　明治の教育者巌本善治

2　本論の題名について

たとえば「東京帝国大学」という如き衆知の名目ならばとにかく、「明治女学校」の如き知る人の稀な固有名詞を題目とすることは奇異かもしれない。しかし歴史社会の展開変転を注目する時、ある社会的事象を目ざして、時間的に空間的に、様々な事象が蝟集してきて核をつくり、またその核から時間的空間的に四方八方に拡散し旋動してゆく現象がみられるのではないかと思う。要はその事象が拡散し、また凝集せしめうる一種の影響力、あるいは生命力を持つか否かが、題名としての表徴を負うにふさわしいか否かになると思う。いま敢て「明治女学校の研究」と題するのは、明治女学校をとりまく事実は、十分それだけの関心をあつめうると思うからであろう。こうした方法は、本論に入ってから木村熊二、鐙という個人の微妙な心裏に立ちいって、明治維新の変動の意味を探ったり、東西文明の接触と受容の波動を感得したり、彼等の特殊性を見分けながら、儒教からキリスト教への転換への必然性を認めようとしたことにも応用されたかもしれない。

3　内　容　梗　概

第一章　明治の婦人社会

明治女学校は明治１８年創立、明治４１年１２月を最後として閉校した。その前後に系譜を求めると、明治初年に遡り、明六社員に親近しているのを見いだす。明治維新をもたらした新思潮は、明治２０年代に入ると伝統尊重の保守的思潮の反撃をうけるが、この現象は婦人観、女子教育思想の場に於ても同様である。明治２２年文部大臣森有礼の死後、その果敢な進歩的女子教育活動はたちまち抑えられ、東京女学校や開拓使女学校の開設に高鳴った開進の鼓動は、再びきくことなく、遂に大正７年臨時教育会議の女子の高等教育に関する答申に至るまで後退し、「我国体及家族制度ニ適スルノ素養ヲ与フルニ主力ヲ注ク」とし、女学校に高等科また専攻科をおくのを認めるのに止った。その間の思想的推移は教育制度の変遷を追って求めることに何より正確に、かつ継続的に資料が得られると考えその方法をとった。

明治初年の新思想の源泉と考える明六社員には、福沢、森の他にも婦人論説者はあったが、まず福沢、森をあげ、中村正直を加えるのが適当であると考える。彼等の婦人論や教育上の意見は、「明六雑誌」上よりも他の場所に於てより多く開陳されたが、しかし彼等の活動を明六社員の活動として一括把握することは、歴史的意味と影響の重要さを認識させるのにふさわしい。近代日本に新しい婦人観の源泉をほり起したのは彼等である。中村正直については、後章に叙述する。

保守と進歩の二思潮が、ときつほぐれつ歴史の中を流れ行く様相は婦人社会に限ったことでは

ないが、つきない興味と関心を誘うのである。構想としては、本論に取扱った時期につづいて、大正６、７年の臨時教育会議の答申とともに、皮肉にも大正デモクラシーの声に応ずるごとく、新渡戸稲造の影響力をうけて発足した東京女子大学、明治女学校出身の羽仁もと子の自由学園が起り、自由主義教育が女子教育の場にも抬頭したことも考えざるを得ないのである。

第二章　木村熊二と明治女学校

1.明治女学校の校長　は木村熊二が明治女学校最初の校長であった事実を資料により明らかにした。

2.『木村鐙子小伝』と「木村鐙子の伝」　は、「木村鐙子の伝」および西島本「木村鐙子小伝」の発見により、木村熊二と巌本善治の子弟関係および創始と継承の関係を明らかにしたものである。

3.富井於菟の場合　は、木村文書および富井家文書により、富井於菟の書簡その他を用い、開校当初の情況を知り、また彼女の履歴、交友（岸田俊、景山英子等）、家族関係により、一方熊二の義弟田口卯吉、その友人島田三郎等の関係から、明治初年の国民的理想であった四民平等、自由民権思想、また文明開化、殖産興業等の目標に生動する国民的意気、また意識を認識し、明治女学校発生の苗床が広く深く耕されて居ることを知った。

第三章　木村鐙の生涯と明治女学校

筆者はまず『木村鐙子小伝』により、後に木村文書中の鐙関係の文書精読の間に、明治女学校発生の因縁が、熊二鐙夫妻の幕府遺臣の苦闘の生活の中に芽生え育ったことを、感得せずに居られなかった。正に「１３年に渡って夫の留守を守りつづけた」「理想と意志に卓抜した婦人に、維新の熱火に鍛えられた聡明なる若き武家婦人の像、二百有余年の儒教教学の築きあげた人間像の見事さを端的にみたのである。」（本書２７９頁）

2.　太平洋を往来する書信　以下は熊二鐙夫妻を内側から眺めたのである。夫妻をつなぐものは手紙の他にない。木村文書に残る鐙の手紙は５８通（下書を除く）。熊二の手紙は３２通ある。

鐙は留守宅の内外、親戚間の出来事、一子祐吉の生長ぶりを事細かに報じ、熊二は恩人ヘルプス一家の光景、ことに夫人の子女教育ぶりをはじめ、アメリカ婦人の生活を報じて、鐙の啓発につとめたようにみえる。しかし、長い別居生活が、お互いの考えに行き違いを生むことはやむをえない。鐙が心を痛めたのは熊二の法外に長くなった滞在と、その間の祐吉の教育のことであった。滞留１０年をすぎ、なお１年半とどまるとの報に、憂慮すべき祐吉の性情を告げ、帰国を切望する鐙に対して、熊二は、「祐吉教導方骨折手にあまり候へば１ケ年半誰そへ御預け可成候」といい、長くなった滞在の始末の容易でないことを告げ、「何事も親類友人連座の中にて考候様な訳には決して不相成候」といってきた。鐙にとっては理不尽とも思えるつき放し方であった。彼等の文通はこの後１年近くたえている。

しかし留守宅に独りたえすごした欠乏と孤独とが、彼女を独立独行の堅固な人間に形成しつつ

あったことを知らなければならない。

3. 開花と結実

苦しんだのは鐙ばかりではない。頑固な武士熊二も、困苦迫る貧しい留学生活を送り、ホープカレッジの校長ヘルプスその他純粋な清教徒達に接し、機熟してキリストの恩恵にふれ、新生の道を知ったのである。両人の苦しい生活の日々が、彼等の明治女学校を醸成していたのである。

明治１５年秋帰朝した熊二は、下谷初音町に私塾を開いて青年達を教導し、諸所の教会堂で講義や説教をし、やがて下谷教会の牧師となった。勿論鐙はただちにキリスト教をうけいれることはできなかったが、熊二の存在と感化は、次第に彼女の心身の疲れを癒し、恢復せしめ、その年の暮に祐吉とともにフルベッキから洗礼をうけた。彼女のめざましい活動は明治１７年秋ごろからはじまったが、１９年８月１８日にコレラで急逝した。熊二の文章をかりれば、「戦国未開の習慣を抛て矯風の主唱となり女子教育を率先し仔々として惰らす死に至りて止みぬ」という。

鐙の信仰を知るには熊二の信仰をたずねるのが早道であろう。熊二の信仰は「めぐみの旅路」（聖書之研究第４号～第１１号）に明らかである。内村鑑三もいうように「めぐみの旅路」は出色の入信記である。大正初年、長野市の教会で、また大正６、７年の頃、牛込教会で試みた説教の原稿を集め、説教集と表記した手記がある。福音の信仰を静かな口調でゆたかに語っている。彼もまた正に「洗礼をうけた武士」で、儒臣の家に生れ、佐藤一斎、河田迪斎、その他を師とし、近親とした彼が、儒教とキリスト教とを明晰に比較し、キリストの僕の道を選びとったのである。この一人の人間の回心が、やがて明治女学校を生み出す力となったのである。

第四章　明治女学校論

第三章では明治女学校出現の原動力を、人間の宗教的回心にたちいってもとめたのであるが、以下女学校という社会的機関出現の推進力発動の経過を、熊二の身辺に探ってみたのである。

熊二が鐙に「日本の女は無学に而当地の女とくらべ候へば実に気の毒の様に存じ候」といった憐みが女学校設立の夢をまねきよせる力となったことはたしかであろう。「当地の女」で身近かなのは、ヘルプス夫人、ベッキ夫人、マレー夫人であり、その他ヘルプス家の娘達のような学友もいる。日本の知友には教育事業にたずさわっている津田仙、新島襄、中村正直があり、森有礼も恩人の一人である。こうした人々が熊二の夢を陰に陽にはげましたであろうと思ったのである。

2.明治女学校の発足とキリスト教 では、 明治女学校の特色が、同類の諸学校と比べてどこにあるかに目をとめてみた。女学校とよばれる学校の情況、専門学校である日本女子大学校、女子英学塾と比較した。

「明治女学校創立主意書」は、明治女学校が社会に活動を開始するに際して世間に向ってのべた宣言書であり、また堂々とした文章なので全文を紹介した。重要な点は、小学以上の女子教育機関が皆無というべき状態は放置できないし、外国人経営の学校はあるが、「外国女子の教育法」

にまかせておくべきでないというにある。富井於菟の手紙には以上の他官立でも公立でもない、少数有志の寄付金によるので、基礎が確立するまで発起者達は無償であるといっている。この経営方針は、好むと好まざるとにかかわらず、後々まで明治女学校の脱却しきれない実体であったように思われる。

明治女学校のキリスト教の特異性は、巌本善治よりも熊二によってより明確に徹底してのこされたように思う。彼の日記や手記によると、早く帰朝して間もなく、外人宣教師達が日本を理解することができないばかりでなく、理解しようともしないことを痛感し、また、一方には日本人の外国文化の取り入れ方の浅薄さに寒心を覚え、「文明開化を上部に飾る明治の春」を哀れとみ、「西洋模倣の現代文明は、手際よく其外観を美麗に装点し来りたれど、その内部の状態を顧ふ時には寒心すべき事も不尠」という。ミッションスクールの教育の女生徒に及ぼす影響についても内部に入って接触しているだけ、巌本よりもはるかに鋭く冷徹な評言を残している。明治女学校のキリスト教のあり方が、宮城女学校生徒のストライキ組に、日本人としての主体性があり、はるかに純粋で自由で理想的にみえたり、成瀬仁蔵が梅花女学校や新潟女学校でとったキリスト教教育にまさっていたのは、熊二の透徹した理解と把握の影響であろう。しかしその真価は外人宣教師や、その傘下にいる日本人の理解できない所であったらしい。

3. 明治女学校の形成

官立東京女学校が明治初年の女子教育理念の生みの子であるとは先にもいったが、その理想は男女同等、男女無差別の教育であり、やがて、婦人界の指導層養成の高等教育を許すものとなるべきは、透徹した観察眼にはあきらかであったろう。進歩派の女子教育には非難すべき行きすぎもあったが、明治２３年、女子高等師範学校の開校とともに、東京高等女学校が女高師の付属高等女学校となり、国による女子の高等教育機関を失って、そのまま太平洋戦争後まで恢復しなかった事実は銘記すべきである。この時森有礼、中村正直によって明確に示された明治初年の女子教育の理想を継承して、その系譜を維持したのは明治女学校であった。明治女学校の歴史的意味と役割がここにあることを認めるのは、正しい評価である。明治女学校といえば高等科が前面に出てくるのも故ないことではない。

『吾党之女子教育』は小形の小冊子で、１５篇の論説（女学雑誌上に発表されたもの）を集め、学外に対しては学校紹介の案内書、学内には生徒の必携書としたものと思う。巻頭の「明治女学校生徒に告ぐ」は明治２３年の講演で、明治女学校の教育の理想、方法、抱負を要約したものである。「創立主意書」と並べて巌本による明治女学校教育の宣言書とみられよう。２２年に第一回の卒業生を出し、続いて高等科が発足している。巌本の意気最も上り、明治女学校の前途は希望の光に輝いてみえた時である。

明治女学校の教科、教育方針等の全容は、ほぼここにみることができるが、本書は旧東京府教

育文書、女学雑誌上の記事その他を資料として、学科その他の情況を能う限り叙述したつもりでいる。

明治女学校の経営が困難であるべきは、出発の当初から経済的基礎の薄弱の故に予想できるのであるが、途中火災にあい、巣鴨に移転する等の不幸もあった。しかし致命的な障碍は、教育制度の整備に伴って、規制がきびしくなり、明治女学校の特色を発揮させた運営が不可能になり、その上明治３６年３月に専門学校令が公布され、３４年開校の日本女子大学校、３３年開校の女子英学塾がそれぞれ法令に従って３７年中に専門学校の資格を得て再出発し、４１年には奈良女子高等師範学校も設置される情勢にあったことである。これが、高等科教育を特色とする明治女学校の立場を困難にしたのは当然である。高等科をめざす生徒の入学が望みがたくなるのみでなく、在学生の中からも女子英学塾や日本女子大学校、さては美術学校、医学校等に転学希望者が出、生徒の質が違ってきたのである。明治女学校衰亡の道は、ここに致命的に開かれたのである。「広く同志を募って資金を得る」理想的の形による私学経営は、当時の社会一般の女子教育に対する認識、教育制度に対する理解には、「理想的」にすぎたのである。木村熊二は廃校後校友会員に「我国女子教育の先導者たる任務を尽して頽れたのであると思へば遺憾はない」といっている。

明治前半の物情騒然たる時代に女子高等教育の必要をとき、「女権女学」のためにその使命を守り、ただに女子高等教育の為めのみならず、あらゆる女子教育の分野に新しい試みを勇敢に試み、善戦した努力と意欲に対し、先駆者の労苦と功績に感謝すべきであろう。

最後に明治２２年春全校の教員・生徒がうつっている写真、生徒の演説草稿、感想文、日記、卒業論文等を諸資料から集め、学内の雰囲気、女生徒像を再現してみたいと試みた。

つぎに濃美震災、足尾鉱毒事件に対する巌本をはじめ諸教師、生徒の反応を見、武道教育におよび、明治女学校の特色というべき教科教育法にふれてみた。また、明治女学校の卒業生がそろって感銘を告げてきかせる巌本校長の道話と教育学の講義も黙過しがたく取りあげてみた。

第五章　巌本善治の女子教育思想

「巌本の女子教育思想」といえば、『女学雑誌』上の社説に材料を限っても、独立した一つの研究課題として十分な内容の豊富さと、重味のある意味を予想させる。しかしあえてこの章を構成上餘論として取扱うのは、本論文中にあっては、その役割を制限していることを示したことになるであろう。

『女学雑誌』は、明治１８年７月２０日発刊し、３７年２月１５日、第５２６号を出して終刊している。ほぼ明治女学校と活動の時期を同じくしているといえよう。５２６号総冊数５４８の社説の教育に関連する論説を、次の項目下にまとめてみた。

2.　女学及び女子教育　　(1)　女学　　(2)　女子教育

3.　教育の自由主義　　(1)　官学と私学付熊本英学校

4. 婦人の本質、家庭、宗教　(1) 婦人の本質と使命　(2) 家庭論の推移　(3) 近代日本婦人とキリスト教　(4) 宣教師派女学校批判

上記の中に、凡そ明治２０年代から４０年に至る巌本の教育論の内容を知ることができる。しかし本論文においてみとどけたかったのは、巌本の思考がどういう傾向に推移したかであるから、「1. 教育思想の背後」と「5. 明治の教育者巌本善治」をとりだしてまとめよう。これを一言にしていえば、明治初年の理想性の推移変化を告げているので、換言すれば理想の喪失を嘆いているのである。巌本は明治３５年という時期に世代の交替を鋭く感じている。日露戦争はまだ起らないが、明治の方向がほぼ決定した時期である。この時、彼は明治初年から日清戦争後にいたる間の重要事件を追って官人の卑劣を慨し、また議会政治にも失望している。（機先論４６２号）やがて人心萎靡の語を頻繁に用い、世人「立憲政体に厭き、国会に倦み、教育に失望し、実業に悲し」む。明治維新の改革には「四民平等の新思想を発揮し」た。「身を危うして公事に鞠躬する気慨は明治維新の際」に換発されたが、現代人は自栄自利に忙しく、「手数料、コムミッション、賄路等の文字は今時一代の普通名詞となれり」という。教育界も亦総失敗であった。「嗚呼、維新以後の事業として観るべきものあらず。大率ね、皆当座の間に合せにすぎず。其の３０年間に蓄積せし潜勢力を叙長し、其の従来の方針のままに次第に展開せしむるに可なる大事業は何処にありや。皆な之れ一新して其の誤りを正し、更に新生命によって復活せざるを得ざるもののみにあらずや」という。

『女学雑誌』上に世間に向って放つ絶望は、明治女学校の敗退に放たれる絶望でもある。女性に夢をかけた巌本生涯の事業は無残な失敗に終ったのである。我々は大正デモクラシーの時期に、新渡戸稲造の影響下に東京女子大学が出立し、明治女学校出身の羽仁もと子の自由学園創設をみて、長い歴史の周期の中には、巌本が女性のために注いだ精神と生命が、思いがけない形で更生することはないだろうかと考えるのであるが、たとえそれが夢であったにせよ、巌本の失敗のあとに、我々を粛然とさせ、限りなく心を痛ましめる事実が残るのは、消すべくもない教訓は残されたとはいえないだろうかと思う。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本の近代女子教育思想史において、独特の位置を占めた明治女学校（明治１８年創立、明治４１年閉校）の全貌とその意義をば、創立者木村熊二・鐙（田口卯吉の姉）夫妻の人と思想との関連において、明らかにしようとしたものである。

第一章「明治の婦人社会」は、明治初年より大正初期に至る間の女子教育制度の展開を概観したうえで、明治女学校設立の思想的背景をなすものとして、福沢諭吉と森有礼の開明的な婦人観

を紹介している。本論文の序論として要を得たものといえる。

第二章「木村熊二と明治女学校」において筆者は、豊富な資料によって明治女学校の設立者が木村熊二であることを証明し、また妻鐙の諸伝記を詳細に比較研究して次の第三章「木村鐙子の生涯と明治女学校」論述の準備をする。その間、巌本善治の鐙への思想的傾倒、木村熊二との師弟関係をも明らかにしている。

第三章において筆者は、木村熊二・鐙夫妻の家系や経歴を述べて、明治女学校の教育理念の形成に対してそれらが大きな役割を演じたことを要領よく立証する。筆者はまず、明治女学校設立の因縁が熊二・鐙夫妻の旧幕臣ゆえの苦難の生活の中に芽生え育ったこと、また１２年に及ぶ夫熊二の米国留学が鐙を独立独行の意志堅固な人間に形成するとともに、その間に取りかわされた数多くの書信によって、元来儒学によって教育された武家の婦人が米国婦人の近代的な教養に向って開眼せられていった事情を説明している。夫熊二は帰国後牧師となり、鐙を入信せしめたが、この宗教的回心が明治女学校出現の原動力であったと説いている。

第四章「明治女学校論」では、明治１８年に木村熊二がキリスト教による人生観と世界観に依拠しつつも、欧米人と異なる日本人独自の立場を離れないで女子教育事業を行おうとして明治女学校を設立したこと、そして明治女学校の教育方針やカリキュラムをはじめ生徒の思想的動向に至るまでの一々を資料にもとづいて丁寧に説明している。またその間、内村鑑三や植村正久が明治女学校の教育に協力したことをも紹介する。また明治女学校が設立された年に巌本善治が『女学雑誌』を創刊して欧米の女権と日本古来の女徳の併有を提唱したことを述べて、第五章「巌本善治の女子教育思想」への足がかりとしている。

第五章で筆者は木村熊二についで明治女学校の校長となった巌本善治はその教育思想を明治女学校の教育実践のうちに示しているが、直接にそれを表明した女学雑誌５２６号総冊数５４８の社説の教育に関する論説をば、女学及び女子教育、教育の自由主義、婦人の本質・家庭・宗教の三項目に分けて詳細に紹介し、木村鐙によって形成された婦人像が巌本善治にうけつがれて明治女学校の教育を規定し、日本的主体性の堅持、キリスト教主義による徳育、真誠の女子教育の目標としたと説いている。

筆者はこのような巌本善治の思想や明治女学校の教師の教育思想が日清戦争後に偏狭な国家主義教育説が横行するに至って、時には当局の忌諱にふれ、『女学雑誌』は休刊を重ねた後、日露戦争の開戦とともに廃刊し、ややおくれて明治女学校も廃校せられるに至ったと結んでいる。

これらの論述は、筆者が多年にわたって実に精力的に資料を蒐集し、これらを丁寧に整理し検討し分析して、明治女学校およびその創立者、継承者に関する諸事実をことこまかに実証的に確定するだけではなく、その実証を通じて、明治女学校の設立者たちの人間像を造出し、明治女学校の精神を析出して、近代女子教育史上における明治女学校の思想的意義を浮彫しようとしてい

る。かくて本論文は平板な明治女子教育史に堕することなく、人間の躍動する明治思想史となることが出来た点は評価に値する。

ただ本論文の各章の叙述には、まま重複が見られ、また叙述が資料の整理、吟味に流れて、本論文を一貫する主旨を、時には読者に見失わしめるうらみなしとしない。また木村熊二のキリスト教界における立場そのキリスト教思想の研究にも欠けるところがないではない。しかし本論文はその論証が精緻確実であり、歴史的理解も深く、近代日本思想史の研究に多大の寄与をなすものと考えられる。

なお上記委員は、提出者が大学院博士課程修了者と同等以上の学力を有することを確認した。

以上の理由をもって、本論文の提出者は、文学博士の学位を授与されるに充分の資格をもつものと認められる。